

# 頑張る姿は美しい

趙 宝 民

ZHAO BAO MIN

私は日本に来る前に、障害者の人たちに対して、同情や偏見したような目で見ていました。しかし、日本に来てから、自分が経験した出来事によって、その考えが変わりました。

それは、平成二十一年の年末頃、伊万里市民図書館で、「身体障害者が描いた絵カレンダーを買おう」という活動が行われていました。私は社会見学のために参加しました。

満開の桜の絵、夕焼け空の絵、心温まる雪景色の絵。一月から十二月まで、それぞれの季節に合った絵が描かれています。絵の下に、描いている人の姿が写真で添えられています。手が不自由なために、口に筆をくわえて色を塗っている人、足と足の間に筆を挟んで描いている人など、懸命に絵を描いている姿に私は胸が打たれました。一枚の絵を仕上げるのにどれだけの時間が要ったことでしょうか。恐らく何日も何日もかかったと思います。私はすごいなあと感じました。しかし、購入してしばらく経つと、障害者たちの苦労を思うこともなくなり、ただのカレンダーとして、机の上に置きっ放しにしまいました。

ある日のことです。私宛に一通の封書が届きました。それは、私が買ったカレンダーの絵を描いた人たちのお礼の手紙でした。どの方の手紙からも、まっすぐに生きようとする心と絵に対する情熱が伝わってきました。

「初めは苦労しました、何度も挫けました。しかし、心まで障害者になったわけではありま

せん。今では毎日、みなさんが買ってくれるように、必死に頑張っています。僕は人間としてこう生きています。」一人の青年からの手紙を読んだ時、はっとしました。今までの自分が何か間違いをしていたように思えてきたのです。私は障害者に対して、かわいそうだという気持ち、安易な同情の気持ちを持つことが多かったことに気づきました。カレンダーを買う時も、友達にこんな話をしました。「かわいそうだね。大変だろうね。」思い遣りより、やはり同情の心から言ってしまった言葉でした。心のどこかで、障害者を差別していたのではないかと思います。

心が歪んでいること、人を妬んだりすること、卑屈になって生きていくこと、そうした貧しい心ほど悲しいものはないということを、彼の手紙から私に訴えているのだと思います。自分は障害者に同情の目を向けていましたが、本当は彼たちが頑張っている姿を見ることによって、私が逆に励まされたような気がしました。苦難を乗り越えて生きること、明るい心を持つこと、自分の夢に向かってひたむきに頑張ること。私は彼たちのことをとても美しいと感じました。

今、彼たちの姿が私の心にしっかり根を下ろしています。怠けたいと思った時に、彼たちの姿を思い出すと、自分に鞭打つことができます。疲れている時でも、その美しい姿を思い出すと、もう少し頑張りたいという気持ちになるし、また努力しようとする力が湧いてきます。